13. 柔道における子どもと指導者および保護者の柔道観

東京学芸大学大学院　藤原　修一
東京学芸大学　射手矢　岬
パリ第5大学　コラン　チェリー
鹿屋体育大学　濱田　初幸
茨城大学　尾形　敬史

キーワード：柔道観、子ども、保護者、指導者

13. Views of School Children, Judo Instructors, and Parents on Judo

Shuichi Fujiwara (Tokyo Gakugei University Graduate School)
Misaki Iteya (Tokyo Gakugei University)
Thierry Colin (Université Paris 5 - René Descartes)
Hatsuyuki Hamada (National Institute of Fitness and Sports in Kanoya)
Takashi Ogata (Ibaraki University)

Abstract

【Purpose】

To attempt to improve a modern ideal way to spread *judo* to school children, and to find reasons for the continuation in *judo*, we investigated the ideas of school children, the judo instructors, and their parents. It is important for the boys and girls who practice judo to understand these ideas. The purpose of the present study is to divide the children, their parents, and the judo instructors into three groups, and to clarify any differences of their views on *judo*.

【Methods】

The subjects were 170 school children (4th to 6th grade students) who were registered in judo clubs, 243 parents, and 157 judo instructors. The questionnaire investigated the areas of; "image of *judo*", "motives for having chosen *judo*", "anticipated efficacy of *judo*", and “participation in other after school activities". Afterwards a comparison between each of the groups was done.

Then the responses were totaled, and the ratios were calculated from the number of answers. Moreover, to see the tendency among the three groups or between two groups the statistical analysis software Stat View and a chi square test were used.

【Results and Discussion】

First, the most common view in the motive for choosing judo was, "the mind and body is trained" at about 80%, and high values were indicated by all three groups. However, "a performing good grade in the game" was about 20%, and "become a champion" was about 10%. Secondly, in the anticipated efficacy of judo, parents and judo instructors answered "child's physical strength" at 70%, "rule and manners of the society" at about 75%, "make the children positively accept challenges", at about 70%, "mental, physical endurance" at about 60% to 70%, and about 60% answered "to be able to withstand repeated pressure". However, about 50% answered "skill of the *judo*". As for a common consideration, it seems that the parents and the judo instructors do not intend to promote judo athletes, they rather want children to get abilities children can use in daily lives. The children answered 30% less than the other two groups that "play with the friend" was the motive for choosing *judo*. Moreover, the three groups in consideration had differences in their responses to motivations; (1) "a beautiful judo is acquired" and (2) "for self defense". Regarding question 1, the children answered 20.6% and the judo instructors answered 60.5%. For question 2, the judo instructors answered 32.5%, and the parents answered 62.1%. Those differences were about 30~40%. Regarding the answer of the anticipated efficacy in *judo*, related to “General motor function” the response was about 10% higher among the judo instructors than the parents. Moreover, the consideration of "Traditional culture of Japan" was about 15% higher among the parents than the judo instructors. This may suggest that the values of the parents and the judo instructors are somewhat different.

【Conclusion】

The tendency and the differences of three groups' views on judo became clear for school children, the parents, and the judo instructors in the present study. The desire to train the mind and body was common in all groups, whereas a large difference could be seen among the groups in regards to the technical acquisition of *judo*, and the activity with friends, in the parents’ and judo instructors’ categories.

１．はじめに

2000年から嘉納師範が提唱された柔道の原点に立ち返り、人間教育を重視した事業として、全日本柔道連盟と講道館が合同プロジェクトして「柔道ルネッサンス」を全国的に働きかけており、競技力、競技成績の向上だけでなく、教育的な意味合いを強く訴えている。 さらに、全国的な調査で子どもの運動能力の低下や、少年犯罪の増加など、子どもたちを取り巻く環境が心配される現在、少年柔道は子供の健全育成の場の１つとして注目されている。

これまで、少年柔道に関して子どもを対象にした研究としては、尾形ら（2007）によって報告されている。子どもたちの柔道観、柔道を始めた動機、練習を続ける中での励みや楽しみ、練習を続ける中で嫌なことなど、柔道に対する子どもの意識について調査され、試合での勝利に楽しさを感じ、柔道の競技力や、体力の向上を評価するとともに、精神面での充実をよかったと感

じる子どもが多いことがわかった。しかし、尾形らの少年柔道に関して指導者を対象とした研究（1984）では、少年柔道の現場での指導内容や、指導計画について現状把握でとどまっており、指導者はどのような柔道観を持ち、指導にあたっているかどうかの報告はない。さらに、少年柔道に関して子どもたちの保護者を対象とした柔道観の研究は少ない。子ども、指導者、保護者それぞれの柔道観について、同時期に比較分析した研究があれば貴重な資料となるだろう。

それに対し、同じ武道である剣道では、少年剣道に関して子どもと指導者の剣道観について境ら（2007）によって報告されている。子どもについては、剣道に対する価値観について、試合で勝つことや､上の級に合格することなどの剣道技術向上に対する意欲が最も高い割合となった。その他に、剣道以外への関心、剣道によって得られた効果、剣道の技能特性、剣道の良さや指導者に対する意識に関する項目で肯定的傾向を示した。しかし、剣道のみならず武道に共通してみられる正座や黙想といった伝統的な行動様式に対して、好意的に感じていないことも明らかになった。指導者については、現在の指導者は気力を重視し、長所を伸ばす指導を心がけつつ、同時に試合による剣道普及の重要性を強く認めていた。また、剣道は他のスポーツよりも教育的意義が大きいと捉えていることも明らかになった。

そこで本研究では、少年柔道に取り組んでいる子どもたち、子どもたちを支える保護者、指導者に対し、柔道に対するイメージ、柔道を行う上での目標、柔道に期待する効果などを調査し、少年柔道に対する子ども、保護者、指導者の柔道観を明らかにすることを目的とした。

Ⅱ．研究方法

１．対象

東京都内及び和歌山県、鹿児島県内１１の柔道クラブに在籍する小学校4年生から6年生、各柔道クラブに在籍する小学校4年生から6年生の保護者、柔道クラブ指導者と全国指導者講習会、第29回全国少年柔道大会、第19回マルちゃん杯関東少年柔道大会、東京都柔道道場連盟大会、第3回岡田弘隆杯争奪つくばユナイテッド少年柔道大会、熊谷市体育大会柔道大会にそれぞれ参加していた柔道クラブの指導者を対象とした。回答数は子ども170名、保護者243名、指導者157名であった。

２．研究方法

(1) 調査期間と方法

調査は、無記名で自記式の調査紙を用い、2009年3月から2009年11月にかけて、各柔道クラブに質問用紙を配布し、後日回収した。各講習会・大会では、講習会・大会当日に質問紙を配布し、回収を行った。

(2) 質問内容

質問紙は二者択一選択形式、多肢選択法と自由記述を用い、質問内容は表１に示したとおり４カテゴリーであった。各カテゴリー内には下位の質問項目が含まれた.

表1　アンケート調査項目のカテゴリーと対象者

Table 1 Categories of questionnaire and respondents.

カテゴリー／対象	柔道のイメージ	選んだ動機	他の活動への不参加の理由	期待する効果
子ども	○	○	○	―
保護者	○	○	○	○
指導者	○	―	―	○

３．分析方法

子ども、保護者、指導者へ

のアンケート調査の回答を単純集計し、それぞれの質問項目において、回答の割合を算出した。3群間の回答に偏りがあるかどうかを調べるため、カイ自乗検定を行った。統計解析ソフト「Stat View」を使用し、有意水準は5％とした。

Ⅲ．研究結果と考察

１．柔道に対するイメージについて

（１）「柔道はあぶないスポーツである・柔道は子どもには危険なものである」について3群間での比較（図1）

子どもでは、「柔道はあぶないスポーツである」について、はい34%、いいえ66%と、否定的意見が高い値を示し、実際に柔道を行っている子どもたちは危険性を感じていないことがわかった。「柔道は子どもには危険なものである」について、保護者では、「そう思う・ややそう思う」の肯定的意見が20.4％、「ややそう思わない・そう思わない」の否定的意見が、79.6％となり、少年柔道を行う子どもたちの保護者は、柔道に対して危険性の低いものであると感じていることがわかった。指導者では、肯定的意見が11.2%、否定的意見が88.8%となった。3群間でカイ自乗検定において5%水準で有意差がみられた（χ^2=22.749、p<0.05）。

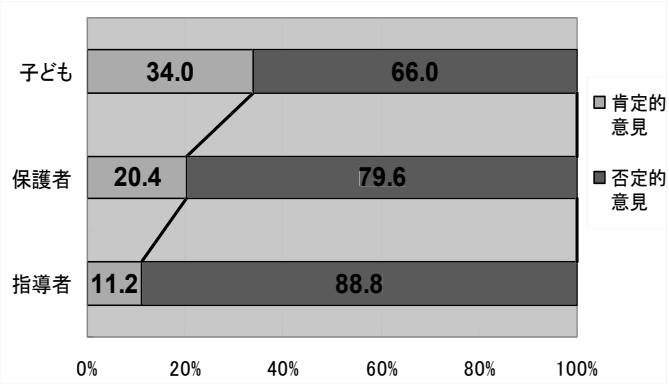

図1　「柔道はあぶないスポーツである」の回答
Figure 1　The percentage for “*Judo* is a dangerous sport”.

子ども、保護者、指導者の順に柔道は危険でないという意見が増加した。実際に柔道を行っている子どもは、保護者、指導者よりも、柔道に対する危険性をより感じていると考えられる。子どもたち自身は実際に柔道をしていく中で、怪我などをする、あるいはその光景を見て、柔道に対する危険性を感じているのではないかと考える。

（２）「柔道は男の子向けのスポーツである・柔道は男性的な価値観を伝えるものである」について3群間での比較

子どもでは、「柔道は男の子向けのスポーツである」について、はい31.3%、いいえ68.7%となった。「柔道は男性的な価値観を伝えるものである」について、保護者は肯定的意見が23.5%、否定的意見が76.5%となった。指導者では、肯定的意見が22.0%、否定的意見が78.0%となった。カイ自乗検定では、有意差がみられなかった（χ^2=4.265、p=0.1686）。

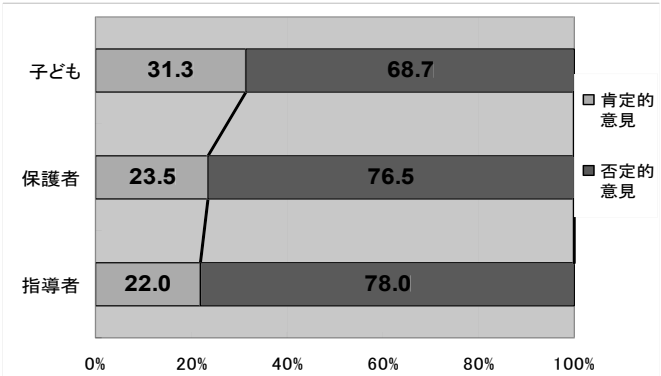

図2　「柔道は男の子向けのスポーツである」の回答
Figure 2 The percentage for “*Judo* is suitable for boys”.

これにより、3群の傾向は共通であり、子ども、保護者、指導者において、否定的意見が約70%以上を占め、男の子のスポーツというイメージを持って柔道をしていないと考えられる。また、現在では、女子柔道選手の認知度も高まり、男女問わないスポーツというイメージが定着していることが伺える。

（3）「柔道は女の子にとって男の子よりも難しいスポーツである・柔道は女子にとって男子よりも難しいものである」について3群間での比較（図3）

子どもでは、「柔道は女の子にとって男の子よりも難しいスポーツである」について、はい21.1%、いいえ78.9%となった。「柔道は女子にとって男子よりも難しいものである」について保護者は、肯定的意見17.2%、否定的意見82.8%となった。指導者では、肯定的意見17.4%、否定的意見82.6%となった。カイ自乗検定において、有意差がみられなかった（χ^2=1.087, p=0.5808）。

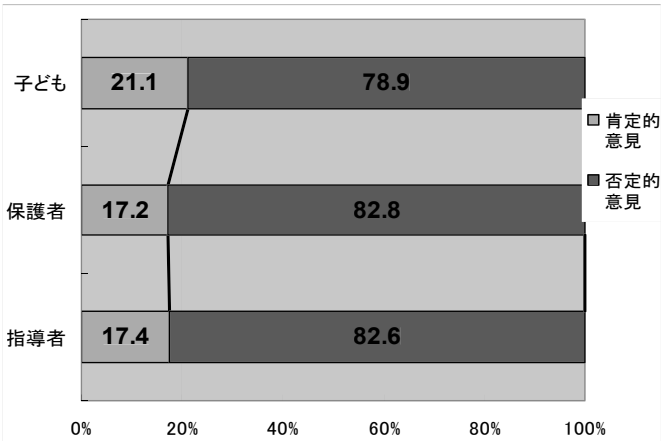

図3　「柔道は女子の方が男の子よりも難しい」の回答
Figure 3　The percentage for " *Judo* is more difficult for girls than boys".

前項目同様、3群の傾向は共通しており、各群約80%以上が否定的意見を示した。実際に、中学生以上の柔道競技の場では、男女が試合を行うことはないが、少年柔道では、性別に関係なく試合が行われることがある。そのような大会において、女子がよい成績を残すこともしばしばみられることを考えると、前節同様男女問わないスポーツというイメージが定着していると考えられる。

（4）「柔道は子どもにとって難しいものである」について、保護者、指導者の2群間で比較（図4）

保護者、指導者のみに質問を行った「柔道は子どもにとって難しいものである」について、保護者は、肯定的意見25.2%、否定的意見74.8%となった。指導者では、肯定的意見20.5%、否定的意見79.5%となった。カイ自乗検定において、有意差はみられなかった（χ^2=1.050、p=0.3056）。保護者、指導者という周りの大人から見ると、約70%以上が柔道は子どもにとって難しいものでないと感じている。

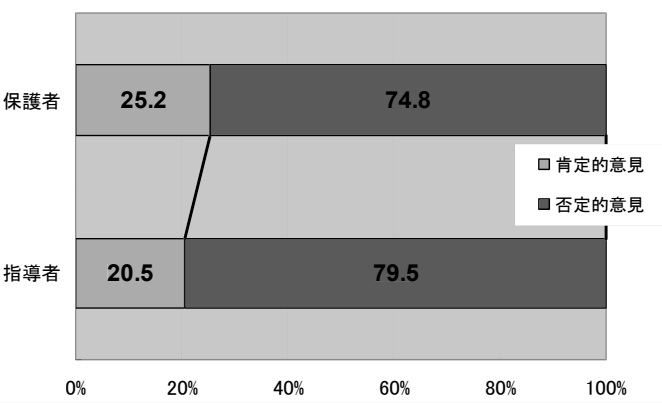

図4「柔道は子どもにとって難しい」の回答
Figure 4　The percentage for " *Judo* is difficult for children".

２．柔道を選んだ動機について

（１）「どうして柔道をやっているのですか・柔道を通して、お子さんに何を期待しますか」について（図5）

柔道を選んだ動機として、子どもでは、「心身を鍛えるため」70.0%、「身を守るため」44.1%、「試合でよい成績を残すため」24.7%の順に、高い選択率を示した。保護者では、「心身を鍛えるため」87.2%、「身を守るため」62.1%、「友達と遊んだり、楽しく過ごしたりするため」40.3%の順に高い値を示した。指導者では、「心身を鍛えるため」80.9%、「きれいな柔道を身につけるため」60.5%、「友達と遊んだり、楽しく過ごしたりするため」42.7%の順に高い値を示した。保護者と指導者の結果について、選択肢ごとにカイ自乗検定を行った結果、「きれいな柔道を身につけるため」（χ^2=16.203、p<0.05）、「身を守るため」（χ^2=37.414、p<0.05）では5%水準で有意差がみられた。また、「心身を鍛えるため」（χ^2=1.551、p=0.2161）、「友達と遊んだり、楽しく過ごしたりするため」（χ^2=0.397、p=0.5288）、「試合でよい成績を残すため」（χ^2=2.988、p=0.0839）、「チャンピオンになるため」（χ^2=0.795、p=0.3725）では、カイ自乗検定で有意差はみられなかった。

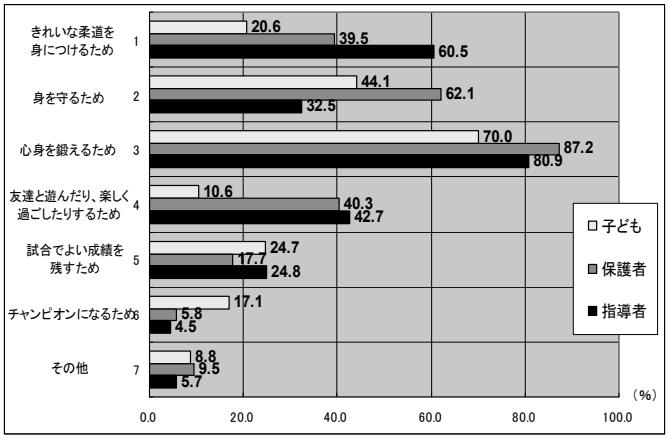

図5　柔道を選んだ動機についての回答

Figure5　The percentage of motives for choosing *judo.*

特に「心身を鍛えるため」では保護者からの強い支持があることがわかった。子どもの結果でもこの選択肢が高い値を示しており、3群間共に支持している傾向が伺えた。また、本研究では子どもは、尾形ら（2007）や境ら（2007）の研究結果とは異なり、「試合でよい成績を残すため」や「チャンピオンになるため」は高い値を示さず、保護者と指導者においても（ここは境ら（2007）の報告と同様）高い値を示さなかった。このことから、子どもと保護者、指導者の食い違いがみられ、境ら（2007）の報告と異なるものとなった。これらのことから指導者と保護者は柔道に期待する点において、柔道の競技選手の育成ではなく、柔道の活動を人間教育の一環としてとらえていることがわかった。このように、競技スポーツが盛んな現在でも、武道的な要素が動機と結びついていると考えられる。

（２）「武道の中で、なぜ柔道を選んだのですか」（図6）について

保護者のみに子どもに武道の中からあえて柔道をさせることを選んだのかについて、質問を行った。その結果、「よい教育を受けさせるのにより適切だから」78.2%、「日本伝統文化を伝えるのに適切だから」78.2%、「教える方法がより良いから」70.4%、「値段が安いから」50.2%、「家族、親戚が柔道をやっているから」31.3%、「安全だから」28.4%、「国際レベルの選手になれるから」17.2%、「人気があるから」15.7%の順に肯定的意見が高かった。

保護者は、柔道に対する教育的な意味合いを強く感じており、逆に柔道の競技者にしたいという傾向は弱かった。これは、尾形ら（2007）の報告で、子どもが国際大会に出場できるように

なりたいという目標が21%で最も高い値であったことと異なる結果となった。さらに、同研究では、動機として家族や親戚の影響が33%で一番高い値となったが、今回の結果では約30%と全体の五番目に高い値であった。また、前節に示した柔道のイメージについての結果では、柔道への危険性を感じている保護者は少ない傾向にあったが、本質問項目の「安全である」には、肯定的に捉えている割合は低い傾向がみられた。保護者は、柔道に対して危険であると感じていないが、反面安全であるとも言い切れないと感じていると思われる。やはり、柔道においても怪我の可能性をはらんでいるため、安全であることに、肯定的意見を持ちづらくさせていることが考えられる。

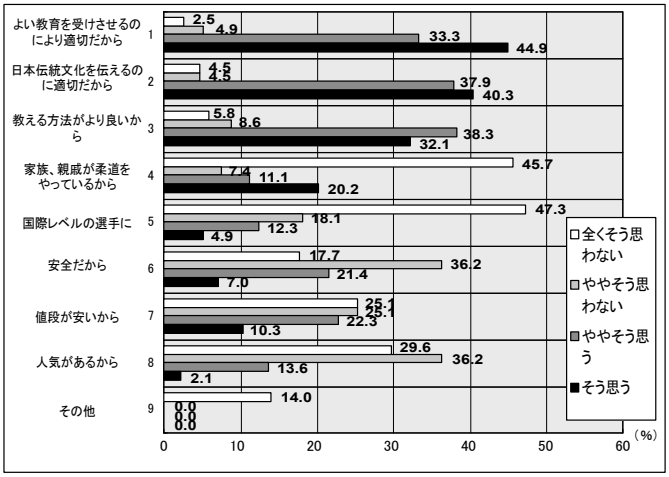

図6　「武道の中で、なぜ柔道を選んだのですか」の回答（保護者）

Figure 6　The percentage for "Why was the *judo* chosen in martial arts?" in parents.

３．他の活動への不参加の理由について

子どもには、「ほかに活動をしていないのはなぜですか」という質問を，保護者には「お子さんが柔道以外の活動をしていないのはなぜですか」という質問を行い、その結果を図7と図8にそれぞれ示した。

柔道以外の活動に参加をしていない者に対して、その理由を選択させた結果として、子どもは、「柔道だけで十分だから」52.9%、「時間がないので」25.5%、「他の活動に興味がないから」11.8%、「自分自身がやりたくないので」9.8%、「お金がかかりすぎるので」7.8%、「親がやらせたくないと言っている」2.0%の順で高い選択率を示した。保護者では、「柔道だけで十分だから」46.2%、「時間がないので」44.6%、「他の活動に興味がないので」24.6%、「お金がかかりすぎるので」16.9%、「本人がやりたくないと言っているので」13.8%、「親にとってやって欲しくないので」0%の順に選択率が高かった。子どもと保護者の結果を選択肢ごとに比較すると、「柔道だけで十分だから」（χ^2=0.527、 p=0.4678）、「他の活動に興味がないから」（χ^2=3.071、 p=0.0797）、「お金がか

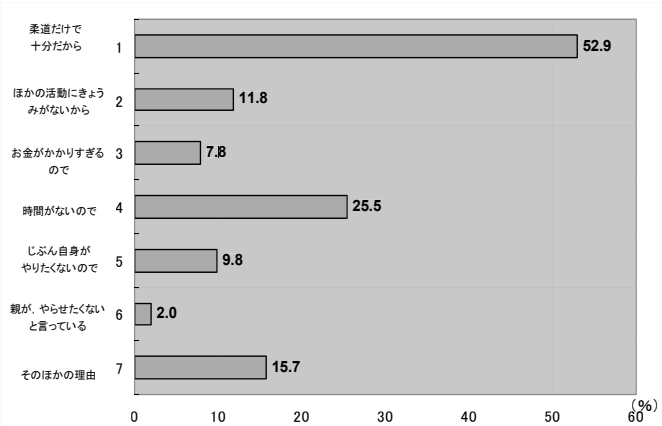

図7　「ほかの活動をしていないのはなぜですか」の回答（子ども）

Figure 7　The percentage for "Why do not you do other activities?" in children.

かりすぎるので」（χ^2=2.093、p=0.1480）において、カイ自乗検定で有意差はみられなかったが、「時間がないので」（χ^2=4.526、p<0.05）においては5%水準で有意差がみられた。

子どもは、柔道だけで十分であると強く考えている一方、保護者は、柔道だけで十分であることと、時間的余裕がないことの2つを、大きな理由として持っている。さらに、子どもにおいて「他の活動に興味がないから」の値が11.8%とそれほど高くないことから、裏を返せば他の活動に興味があることも考えられる。境ら（2007）の報告によると、剣道をしている子どもは他の活動への興味が非常に高かったとあることから、武道をしている子どもの武道以外への活動の関心は高いものと推察される。保護者も同様に今回の結果では、他の活動に興味がないことに多くの支持を得ていないことから、子どもが他の活動に興味がないわけではないことを知っている状況で他の活動に参加をさせていないものと思われる。

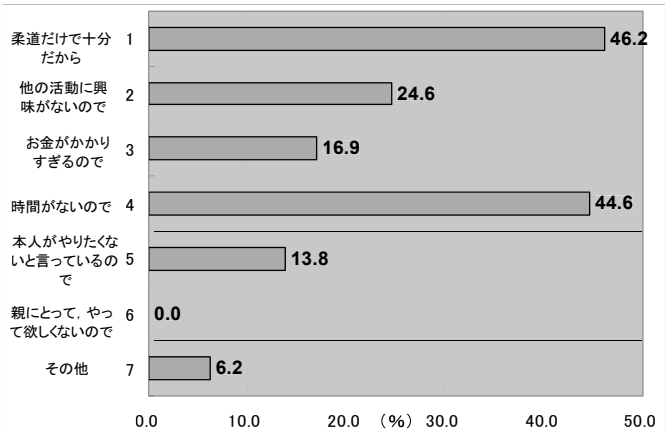

図8 「お子さんが柔道以外の活動をしていないのはなぜですか」の回答（保護者）
Figure 8　The percentage for "Why does not your child do other activities excluding *judo*?" in parents.

４．柔道に期待する効果について

（１）「柔道を通して、何が身に付くと思いますか」について（図9）

保護者では、「社会のルールやマナー」75.7%、「子どもの体力（筋力やスピードなど）」69.1%、「柔道の技能」53.9%、「一般の運動機能（走る、跳ぶ、バランスをとるなど）」36.6%、「日本の伝統文化」25.9%の順に高い値を示した。指導者では、「社会のルールやマナー」76.4%、「子どもの体力（筋力やスピードなど）」67.5%、「柔道の技能」48.4%、「一般の運動技能（走る、跳ぶ、バランスをとるなど）」48.4%、「日本の伝統文化」11.5%の順に高い値を示した。保護者と指導者の結果を選択肢ごとにカイ自乗検定を行った結果、「一般の運動機能（走る、跳ぶ、バランスをとるなど）」（χ^2=5.463、p<0.05）、「日本の伝

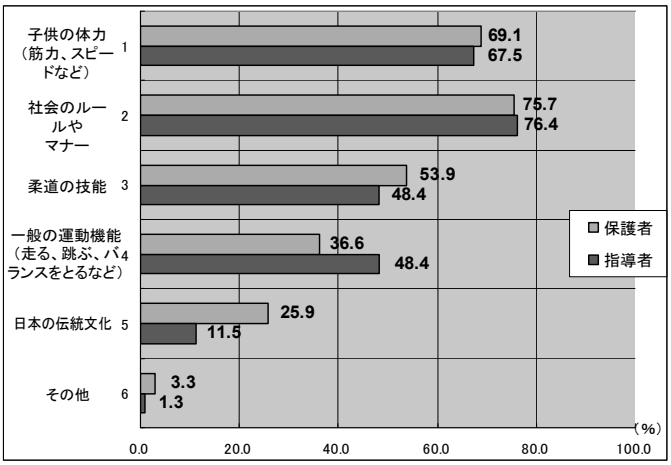

図9 「柔道を通して、何が身に付くと思いますか」についての保護者と指導者の回答
Figure 9　The percentage for "What do you think adheres to the body through the *judo*?" in instructors and parents.

統文化」（χ^2=12.350、 p<0.05）で有意差がみられ、保護者と指導者には共通の傾向はみられなかった。意外な結果としては、保護者の方が指導者より、柔道を通じて日本の伝統文化が身につくと捉えていた。また、「子どもの体力（筋力やスピードなど）」（χ^2=0.116、p=0.7334）、「社会のルールやマナー」（χ^2=0.027、 p=0.8705）、「柔道の技能」（χ^2=1.156、 p=0.2822）で、有意差はみられなかった。

指導者、保護者共に、ルールを守ることやマナーといったモラルや体力向上や健康増進など生活にも活かせる筋力やスピードが身に付くことを柔道に期待している。保護者や指導者共に柔道の技能は三番目であった。柔道本来の技能よりも、生活やその他の運動にも必要な体力や社会性が身に付くことを期待していることは、境ら（2007）の結果と類似しており、少年柔道での活動は、体力や社会性の伸びる場であると保護者や指導者は考えていることがわかった。

（2）「柔道を通して、お子さんのどんな態度が発達しますか」について（図10）

保護者では、「前向きに挑戦する」76.1%、「精神的かつ肉体的な忍耐力」73.3%、「長く繰り返すことのできるがまん強さ」60.1%、「社会のルールの遵守」51.0%、「美しい動作（振る舞い）の追究」2.1%という順に高い選択率を示した。指導者では、「社会のルールの遵守」66.2%、「前向きに挑戦する」62.4%、「長く繰り返すことのできるがまん強さ」58.6%、「精神的かつ肉体的な忍耐力」55.4%、「美しい動作（振る舞い）の追究」7.0%という順に高い値を示した。保護者と指導者の割合の比較をカイ自乗検定で行ったところ、「社会のルールの遵守」（χ^2=9.006、 p<0.05）、「前向きに挑戦する」（χ^2=8.665、 p<0.05）、「美しい動作（振る舞い）の追究」（χ^2=6.083、 p<0.05）、「精神的かつ肉体的な忍耐力」（χ^2=13.444、p<0.05）では、5%水準において有意差がみられ、「長く繰り返すことのできるがまん強さ」（χ^2=0.087、 p=0.7679）では5%水準において有意差はみられなかった。

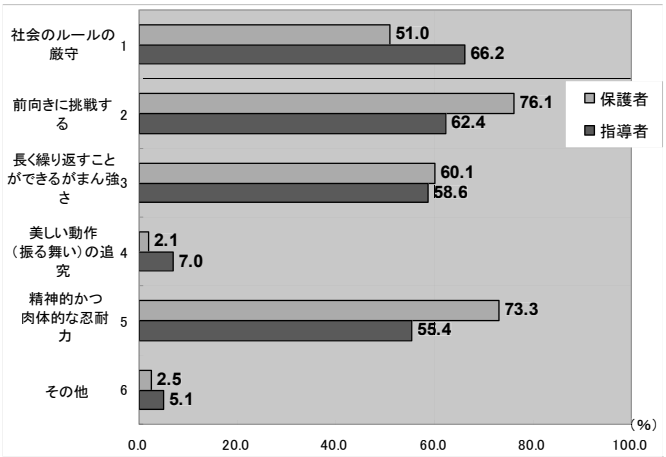

図10 「柔道を通して、お子さんのどんな態度が発達しますか」についての保護者と指導者の回答

Figure10 The percentage for "What attitude develops to the child through *Judo*?" in instructors and parents.

保護者の上位3つの項目は精神面（気持ち）の強さを期待しているとまとめることができそうである。これらの項目については保護者、指導者共に50%を超える高い選択率を示し、子どもに対して、精神面（気持ち）のがまん強さの発達を期待しているという傾向が伺えた。境ら（2007）の研究では指導者は子どもの指導において気力を重視していると報告している。剣道の指導者の考える「気力」というものの中に、がまん強さも含まれると考えると、柔道の指導者においても子どもに対して精神面の育成を目指していることが伺える。今回、精神面に関する項目の中で、前向きに挑戦する態度では、保護者約76%、指導者約62%となり、保護者の方が高い値を示したことから、保護者は、指導者以上に柔道による精神面の発達を期待していることが考えられる。

期待する効果についての上述の2項目は柔道を選んだ動機の中の「心身を鍛える」という項目とリンクしているものと考えられ、保護者や指導者共に、柔道を通しての心身一元論的な教育的効果を重視していることが明らかとなった。

Ⅳ．まとめ

本研究では、柔道を行っている子ども170名、その保護者243名、指導者157名を対象とし、柔道観についてアンケート調査を行い、子ども、保護者、指導者間の柔道観を明らかにすることを目的とした。3群間または2群間で回答の割合を比較し、以下のような結果を得た。

1．柔道の危険性について、指導者、保護者、子どもの順に危険と感じていなかった。柔道の与える男性的イメージと柔道が女性にとって難しいかどうかでは、3群間共通で否定的な傾向がみられ、子どもにとって難しいかどうかでは否定的意見が多かった。

2．柔道を選んだ動機として、３群共に心身を鍛えるためを強く支持した。また、試合での勝利やチャンピオンになることには強い支持を得なかった。特に、保護者は武道の中から柔道を選んだ理由として、教育を受けさせるのに適切な場であることと日本の伝統文化を学ばせる場であることの意識が強く、柔道を教育的な場として捉えていることがわかった。

3．他の活動への不参加の理由について尋ねたところ、子どもと保護者は他の活動に参加しない理由の傾向は似ている点が多いことがわかった。また、保護者は、子どもが柔道以外にも興味があることはわかっているが時間的余裕がないため、他の活動に参加させていないことがわかった。

4．柔道に期待する効果について、保護者は柔道の技能だけでなく、体力向上や健康増進、その他生活においても活かせる能力を身に付けさせたいということがわかった。また、身に付けさせたい態度では、保護者、指導者共に精神面（気持ち）の発達を強く期待していることがわかった。保護者と指導者は共に柔道を通して、心身の発達を期待していることが伺えた。

以上のことから、柔道は安全とは言い難いが、子どもにとっては男子のみならず女子も行える武道（スポーツ）と考えられている。さらに、柔道は心身の発達を促すための手段と考えられ、子どもや指導者は試合での勝敗やチャンピオンにはそれ程こだわっていない。時間的な制約から柔道を第一優先にしているが、柔道以外の活動に興味がないとは言えない。

今後の課題として、同様の調査を海外でも行い、文化の異なる国と柔道観を比較することにより、日本人の柔道のとらえ方をより明確にしたいと考える。

引用参考文献

遠藤正明、後藤清光：「柔剣道に対する意識調査と指導上の一考察」、警察学論集、第43巻、第5号、p.20－34、1990

猪木原孝二：「米国人における柔道に関する意識調査」、岡山理科大学紀要Ｂ、人文社会科学、23号、p.237－243、1987

石黒光祐、石黒昇、竹田完治:「柔道部員の柔道に対する考え方の一考察」、武道学研究、第21巻、第2号、p.121－122、1988

河崎武夫：「柔道に関するイメージ調査」、柔道、第46巻、第10号、p.57－63、1975

河崎武夫、白銀茂夫、金芳保之、篠原芳雄、高木正皓：「柔道に対するイメージ調査」、柔道、第50巻、第12号、p.62－68、1979

講道館ホームページ：http://www.kodokan.org/j_basic/renaissance_j.html
桑原伸弘：「柔道の継続理由に関する研究－中高生対象のアンケート調査から－」（口頭発表）、日本武道学会、Vol.32、p.66、1999
村田直樹：「柔道の意識調査―練習者の柔道に対する考え方について―」、柔道、第49巻、第11号、p.52－57、1978
尾形敬史、小谷澄之、佐藤義治、松永郁男：「少年柔道の実態調査」、講道館柔道科学研究会紀要、第Ⅵ輯、p.65－73、1984
尾形敬史、風間美佳：「少年柔道の指導に関する一考察」、講道館柔道科学研究会紀要、第十一輯、p.115－128、2007
境英俊、山川眞一、藤原章司、石川雄一、長野智香：「小学生と指導者の剣道観に関する一考察」、武道学研究、第40巻、第1号、p.9－25、2007
高橋進：「柔道に対する高校生の意識構造について（その3）－柔道授業における好嫌的因子構造－」、関東学園大学紀要、第13巻、p.69－79、1988
田中秀幸、窪田辰政：「大学生の柔道に対する意識の研究（4）」、静岡大学教育学部付属教育実践総合センター紀要、No.13、p.87－98、2007